

羅臼町立小学校・羅臼町立幼稚園適正配置計画

【 資料 1 】

「子どもたちにとって望ましい教育環境の整備を目指して」

令和2年12月

羅臼町教育委員会

1. 羅臼町の目指す教育（子ども像）

《羅臼町教育目標》

ふるさと羅臼の躍進を創造し いきいきと逞しく行動する

心豊かな町民の育成

【羅臼町の求める児童・生徒像】

- 羅臼の文化や人とのつながりに興味・関心を持ち、進んで触れあおうとする子ども
 - 羅臼の自然の仕組みと関係の良さに気づき大切にしている子ども
 - 羅臼と国内・国外とのつながり、地域比較を通じたグローバルな視点に立つ子ども
 - 自分の考えをはっきり表現し、相手の立場や考えを尊重する子ども
- ・ 更に「ESD」を加えて育てたい資質・能力
 - 持続可能な開発に関する価値観
 - 体系的な思考力
 - 代替案の思考力
 - データや情報の分析能力
 - コミュニケーション能力
 - リーダーシップの向上

『幼稚園』では・・・こんな子どもに育ってほしい。

- ① 心身ともに健やかで、心豊かでたくましく生きる子どもの育成

『小学校』では・・・こんな子どもに育ってほしい。

- ① ふるさと羅臼を愛し、未来を担う、人としての豊かな心と確かな力を身につけた児童の育成。
- ② ふるさとに誇りを持ち、進んでかかわる子

『中学校』では・・・身に付けさせたい。

- ① 自ら学び深く考える力
- ② 清らかで自他を愛する心
- ③ 健やかでたくましい体

『高校』では・・・こんな生徒に育ってほしい。

- ① 自ら学ぶ意欲をもって、社会の変化に主体的に対応する生徒
- ② 奉仕の心をもって、たくましく行動する生徒
- ③ 基本的な生活習慣を身に付け、社会規範を守る生徒
- ④ 強固な意志と実行力をもって、心身を錬磨する生徒

2. 適正配置計画策定の概要

① 適正配置の目的

1. 小学校における児童・生徒の減少に伴う学校規模の適正化と、教育環境の向上を図ることを目的とします。

② 適正配置計画の期間

1. 本適正配置計画の期間は、2020年から2024年までの5年間とします。

③ 適正配置の実施対象校

1. 本適正配置の実施対象校は次のとおりとします。
 - (ア) 羅臼小学校・春松小学校
 - (イ) 羅臼幼稚園・春松幼稚園（※1）

④ 今後の流れ

1. 校長会及び教頭会への諮問
2. 教育関係委員（社会教育委員の会・スポーツ推進委員会、図書館協議会）への諮問
3. 各PTA・議会・地域住民への説明
4. 適正配置計画の策定

（※1）：少子化により集団の中で多様な経験をつむ事が困難になり、家庭や地域では習得できない多様な経験の中から大きく成長していただきたいものと考え幼稚園も対象としました。

3. 羅臼町の教育課題

- 少子化時代に適応した教育環境整備について、各学校では、地域の過疎化と少子化により児童・生徒の減少が急激に進んでおり、このような現状から、常に安定した適正な規模の学校で学習活動がおくられるよう、当町の幼稚園・小学校の適正な規模・配置の在り方について検討することが急務となっています。
- 全国学力・学習状況調査の結果、平均点を大幅に下回る項目があるなど、全体的に学力の低下がみられる。原因は多々考えられるが主に、家庭学習（予習・復習・宿題）が充分ではないこと、教職員の授業力や指導力についての工夫が必要なこと、児童生徒間や対教職員とのコミュニケーションの不足などがあげられます。
- スクールカウンセラーからは語彙力について、発達段階に応じた平均より下回っているとの報告がありました。幼児期からの読書や会話、家族や友達とのコミュニケーションがうまく図られていないことなども考えられる。
- 全国体力・運動能力調査においても、平均を下回っている。（交通機関の活用により通学時間が長くなり、毎日の徒歩の時間が減少することに伴い、体力の低下や家庭学習の時間の減少といった様々な問題も生じ得るところですが、校門から一定の距離でスクールバスから降車させ、歩数を確保する取り組みを行っている学校もあります。長時間スクールバスに乗った状態から学校での活動に入るために心身の状態を円滑に切り替えていく観点から学校に到着した後、軽い運動を行う時間を設けている学校もあります。）

4. 現状

(1) 人口の推移 羅臼町の総人口は、2010 (H22) 年1月1日現在、6,024 人だったものが、2015(H27)年には5,503 人、2019年(R元)には4,930 人に減少しているとともに、子どもの出生数も44人、28人、25人と減少傾向にあります。

(2) 園児・児童数の推移

ア 幼稚園児 2019 (令和元) 年度は93人。2020(令和2)年度は93人、2021(令和3)年度95人、2022(令和4)年度92人、2023(令和5)年度75人であり、令和5年度に大幅な減少が見込まれている。

イ 小学校児童数 2019 (令和元) 年度は243人。2020(令和2)年度は233人、2021(令和3)年度227人、2022(令和4)年度223人、2023(令和5)年度215人、2024(令和6)年度200人、2025(令和7)年度185人、2026(令和8)年度168人と減少の一途で確実に少子化が進行している。

【 羅臼町内の子ども出生数 】

出生年	2020	2019	2018	2017	2016	2015	2014	2013	2012	2011
出生数	19	22	25	32	38	28	29	33	42	49
2020 現在	19	16	25	34	33	28	32	33	40	49

年	2010	2009	2008	2007	2006	2005	2004	2003	2002	2001
出生数	44	32	38	43	37	39	51	58	50	59
2020 現在	41	32	38	43	37	39	51	58	50	59

【学級編成の基準】

	単式学級		複式学級	
小 学 校	1 学級当たり	1・2年生の 特例	2 個学年合わせて	1 年生を含む場合
	児童数 40 人まで	児童数 70 人超で 3 学級	児童数 16 人まで	児童数 8 人まで
中 学 校	1 学級当たり	1 年生の特例	2 個学年合わせて	
	生徒数 40 人まで	生徒数 70 人超で 3 学級	生徒数 8 人まで	
幼 稚 園	1 学級 35 人以下が原則			

5 適正規模の考え方と課題

学校規模については、小学校は学校教育法施行規則において、「小学校の学級数は 12 学級以上 18 学級以下を標準とする。」とされ、中学校においては、小学校の基準を準用するとされております。また、文部科学省資料「これからの学校づくり」の中で、学校の基本的条件を満たすための指標として学校規模を学級数別に「12 学級以上 18 学級以下」を適正規模としています。すなわち 1 学年複数学級（2～3 学級）を適正規模としているところです。

☆ 小規模校の一般的なメリット・デメリット

項目	小規模校のメリット	小規模校のデメリット
生活面	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども相互の信頼関係や相互理解が強くなる ・子ども一人ひとりを把握しやすい。 ・教職員と保護者との人間関係が密接になる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・交友関係が固定化しやすい。 ・活気が乏しくなりやすい。 ・切磋琢磨する機会が少なくなる。 ・良い意味での競争心が育ちにくくなる。
教育活動面	<ul style="list-style-type: none"> ・個に応じた配慮ができる。 ・教材教具が活用しやすい。 ・施設利用や施設整備に余裕をもってできる。 ・指導が徹底しやすい。 ・学校行事等での活動の場が増える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学び合いの場が持ちにくい。 ・学校図書、教材教具等の種類が少ない。 ・クラス替えができない。 ・クラブ等の数が限定される。 ・学校行事等での役割が固定化する。
教職員の組織 学校経営面	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員間の相互の連携が密になる。 ・意思疎通が図りやすい。 ・業務と責任が明確になる。 ・指導方針などがまとまりやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教科数を満たす教育数の確保が難しい。 ・公務分掌が多く業務処理に追われる。 ・新任、若手教員の育成が難しい。 ・教員の創意工夫に限りがある。

【現状で考えられる課題】

- 2021年度新入学児童が春松小学校では一桁の9名となり、6年後は6名となる。その時点で1年生と2年生の合計が17名となる。
- 全体的に学力が低い。原因は多々考えられるが主に、家庭学習（予習・復習・宿題）が充分ではないこと、教職員の授業力や指導力についての工夫が必要なこと、児童生徒間や対教職員とのコミュニケーションの不足などがあげられます。
- 東西に長い地域で、冬の豪雪や吹雪などの自然環境を考えるとスクールバスが望ましいと考える。しかしながら現在のところ働き手不足等によりスクールバスを民間委託するのは難しい。また、現在実施している定期バスを通学バスとして併用するのは学校教育行事及び緊急時対応としては（部活動及び土・日曜日、又平日以外の学校事業等）支障をきたしている。